

ボンの手紙と『アブサロム、アブサロム！』

植野達郎

『アブサロム、アブサロム！』において語られるトマス・サトペン一家をめぐる物語について、いったい何があったのかと問うとき、すでにフォークナーの掌中に取り込まれているのかもしれない。たとえばワトキンスのように『アブサロム、アブサロム！』の中のさまざまな矛盾を指摘するにしても、その矛盾の意味するところについて考察を加える必要があるだろう。たとえば、語り手の思い違いなのか、あるいは情報不足なのか、それともフォークナーの単純な間違いなのか、あるいは作為的な間違いなのかを考察する必要がある。というのも、事実と言えるものはきわめて少なく、語り手の憶測、推測に基づくものがあたかも事実であるかのように提示されているからである。というよりは、いわゆる客観的な事実を積み上げても、他者に何かを伝えることは望めないであろう。そこに事実として提示される事柄の因果関係なり、その事柄に関係する人物についての解釈が披露されることによって、客観的な事実が聞き手に、あるいは読み手に衝撃を与えるのである。クレアンス・ブルックスが指摘しているように、『アブサロム、アブサロム！』は「『歴史』のほとんどは実際にある種の想像の産物であるという論題に対する説得力を持った解説書」(Brooks, 311)であるとするならば、その解説書ができあがる過程を見ていくことにしよう。

『アブサロム、アブサロム！』は語り手たちの憶測、推測、あるいは想像を元にサトペン家の物語が紡がれている物語である。その中で、数少ない事実として挙げられているものが、クエンティンが父、コンプソン氏とリスの狩猟中に見つけたサトペン家の墓石、コンプソン氏がクエンティンに宛てたローザの死を知らせる手紙、そしてジュデイスがクエンティンの祖母に預け

たボンからの手紙という具体的な事物を伴う事柄と、サトペン家に纏わるいくつかの事柄、たとえばヘンリーとその父親、トマス・サトペンが喧嘩をし、ヘンリーが相続権を放棄して家を飛び出したこと、ヘンリーによるボン殺害、およびローザとクエンティンがサトペン家でヘンリーを発見したことなどに限定されている。しかしながら、事実として確認できることと、事実が内包する実態とは異なるものであることは言うまでもないであろう。ヘンリーが家を飛び出したことは事実であるにしろ、その原因については推測の域を出ない。あるいはクエンティンがサトペン家でヘンリーと会ったことは間違いないが、その二人の間でどのようなやりとりがあったのか、クエンティンは意識的にか、無意識的にか語ることはない。

ローザ、コンプソン氏、クエンティン、シュリーブそして匿名の語り手によって語られている事柄は、語られる段階ですでに語り手に取捨選択されているし、彩色が施されているのである。というのも、聞き手は語られている話を自らの関心に従って、軽重をつけて受け取っているからである。たとえば、第一章でローザがクエンティンに語るサトペンは、彼女が抱くイメージに色濃く染まっていることは間違いない。

どうやらこの悪魔——その名前はサトペンだ——（サトペン大佐だ）——サトペン大佐。どこからともなく、前触れもなく、見馴れない黒人たちとともにこの土地に現れ農園を作った——（むりやり農園を奪い取った、とミス・コールドフィールドは言う）——むりやりに。そして彼女の姉のエレンと結婚し息子と娘を一人ずつ産んだ——（やさしさを見せることなく産んだ、とミス・ローザ・コールドフィールド）——やさしさを見せることもなく。子供たちは彼の誇りであり、老後の楯であり慰めでもあったはずなのに、ただ——（ただ、子供たちが彼を破滅させたのか、あるいは彼が子供たちを破滅させたのかした。そして死んでしまった）——死んでしまった。悲しむ人もなく、とミス・ローザ・コールドフィールド——（彼女は別だ）そう、彼女は別だ。（それにクエンティン・コンプソンもだ）そうだ。それにクエンティン・コンプソンもだ。(9)

クエンティンの内部で交わされるこの対話は、ローザが語る話の特徴を窺わせていると同時に、語り手と聞き手の関心の違いを浮き彫りにしている。それはサトペンに纏わる話を事実関係にとどめようとするクエンティンに対

し、ローザが執拗に彼女なりの色づけをし、解釈しようとしていることである。ローザにとっては、単に出来事の結果だけを受け止めるだけでは、サトペンに関しては何も理解したことにはならないかのようである。しかし、「そうだ、ぼくはあまりにもたくさん話を耳にしてきたし、話を聞かされてきた。あまりにもたくさん、あまりにも長い間、話に耳を傾けねばならなかった」(207)と述懐しているように、クエンティンにとってはサトペンのイメージはすでにできあがっていたのではないだろうか。そこに改めてローザの話の聞かされるクエンティンにしてみれば、すでに知っている話を聞かされているという思いに捕らわれたとしても不思議ではない。しかし、ローザがクエンティンにサトペンに纏わる話を聞かせることの中には、「おそらくあなたは文筆家になり・・・いつの日か、このことを思い出し、それについて書くでしょう」(9-10)との言葉が示すように、ローザの眼に映じたサトペンの姿を後世に伝えたいという思いが含まれているのである。クエンティンがローザの話の聞いた翌年に入水自殺をしてしまうことを知っている『アブサロム、アブサロム!』の読み手は、ローザの思いは叶わなかったことを知るとともに、シュリーヴとサトペンの物語を語るクエンティンに、文筆家になったときのクエンティンのイメージの一端を思い浮かべることができる。

とすれば、ローザが指摘したように、サトペンという人物が現れ、大農園を作り、結婚し、子供を生み、死んだというのでは、サトペンという名前がつけられていても、その顛末は単なる成り上がった一人の人間の話ということではしかない。それでは物語は生まれないのである。物語が生まれるためには聞き手の関心を惹くような事柄が必要である。つまり、ローザが43年間もの間、胸に秘めていて、是が非でも語らねばならないと思っていた話だからこそ、聞き手が惹き込まれるのである。ローザがクエンティンに語るサトペンとはまさにトマス・サトペンとしての存在感を有している人物についての話であり、その像が「悪魔」と名づけられようとも、そのサトペン像が彼女にとっての真実なのである。もちろんローザにとっての真実が、他の人にとっての真実とはならないことは言うまでもないことかもしれない。だが、ローザがクエンティンに示したサトペン像は少なくともサトペンの一面を表すものであり、そのように解釈されることも可能なものであった。だからではないのか、後にクエンティンから南部の話の聞いたシュリーヴがサトペンを「悪魔」と呼んでいるのは。カナダ人であり、南部については先入観を持っていないはずのシュリーヴは、ローザの描くサトペン像に真実の一端がある

と受け止めたのである。

ローザが提示したサトペン像は、一度は婚約しながらも、ローザを侮辱するような言動を弄したサトペンに抱いている憎しみによって歪められていると、指摘することもできよう。あるいはローザが描くサトペンはあくまでもローザの目に映じたサトペンでしかないので、別のサトペン像が提示される必要があると述べることもできよう。そのような展開を予想しているかのようには、ローザが知ることのないサトペン像がコンプソン氏によって示される。コンプソン氏は、ヨクナパトーフア郡に姿を見せ、サトペン荘園を築き上げ、ローザの姉であるエレンと結婚して成り上がっていくサトペンを町の人々がどのように見ていたのかを示すだけでなく、さらにはサトペンの唯一の友人であり、サトペンが出自について語ったとされるクエンティンの祖父、コンプソン将軍の話を示す。コンプソン氏が示すこのサトペン像は、明らかにローザが提示するサトペン像とは異なるものである。たとえば、黒人たちが働いているときに、「彼らに向かって声を荒げることはけしてなく、逆に、自ら手本を示すことによって、すなわち威圧して恐怖を抱かせるのではなく、寛大さを見せることで彼らの心の奥底をつかむ」(37)サトペンとは、ジェファソンの町の人々には異質と思える行動をとりながらも成り上がっていく人物としての一面を明らかにしている。やがて町の人々は異人としてのサトペンを受け入れていく。「彼を拒絶できないほどに金を持っているから」(72)である。裸一貫から叩き上げて、サトペン王朝を築き上げようとするサトペンは、ウォッシュ・ジョーンズならずとも英雄と見做すことができる人物であると言えよう。

町の人々が抱くサトペン像とローザが提示するサトペン像の落差を埋めるかのように、コンプソン将軍はもう一つのサトペン像を提示する。サトペンは突然、「やりたいことではなく、やらねばならないことを、望むと望まないとにかかわらず、やらねばならないことを自覚したのである。というのも、もしもそれを行わなければ、自分らしく生きることはできないだろうと思ったから」であると。このサトペンを評して、コンプソン将軍は「サトペンの問題はイノセンスだった」(220)と語っていたことが紹介される。サトペンが自らの生い立ちを語った唯一の人物であるコンプソン将軍のサトペン像だからこそ、説得力を持っているかのようなのである。しかし、確認しておかなくてはならないことは、コンプソン将軍によって示されるサトペン像がどのようなものであれ、それはあくまでも将軍が抱いた像でしかないことである。さ

らに言えば、その像が説得力を持つとしても、それは聞き手が聞き手自身の中に醸成されつつあったサトペン像を強化する役割を果たしたからであろう。たとえば、ローザであれば、コンプソン将軍が提示するサトペン像を聞いたとしても、彼女自身のサトペン像を変更することはあるまい。

このようにサトペンの像がそれぞれ示されるのであるが、翻って考えてみると、ローザ、町の人々、コンプソン将軍それぞれが思い描くサトペン像は基本的には同一のものではないのか。すなわち、コンプソン将軍が考えたように、目的に向かって遮二無二突き進むサトペンは、周囲の人物について一顧だにすることはない。何事をも恐れず、邁進するサトペンは、サトペン家を引き継ぐ息子が必要だと考えれば、息子を手にする事しか考えることができなくなる。その結果としてローザが侮辱されたと思う言動を吐き、彼女はサトペンを「悪魔」と考えるのであるが、サトペンにしてみれば、自分の思うところを述べたに過ぎない。さらにはミリーに生ませた子どもが女の子だったとき、彼女を愚弄する言葉を発し、彼女の祖父であるウォッシュ・ジョーンズに殺されるのであるが、これもローザに対したのと同様、息子を望む気持ちが言わせたのである。周囲の人の気持ちがわからないだけでなく、わかろうともしないという意味では無知であるとともに、目的に向かって邁進する純粹さを併せ持っているサトペンは、まさにイノセントな人物である。しかしながら、長じてもイノセントなままであることは、コンプソン将軍が言うように問題となる。

こうしたサトペン像の変遷が物語っていることは、一つの対象を見る見方が複数存在し、そのいずれもが一面の真理を持っていることである。換言すれば、文脈が異なれば、それまでの見方に変更を加える必要性が生じるということである。『アブサロム、アブサロム!』において、異なる文脈は存在しないと思われている事柄、すなわち確かな事実と見做されているものの中で、はたしてほんとうに事実なのかと改めて確認すべき事柄がある。それは、ジュデイスが受け取ったボンからの手紙である。

この手紙をめぐるのは、エリザベス・ミューレンフェルドが詳細な分析を試みている。まず、クエンティンがこの手紙を「死んだ言葉が4年間、それからさらに50年以上を経て、やさしく、冷笑的で、きまぐれで、度し難く厭世的に語りかける」(129)と考えていることに、異議を唱える。この手紙の冒頭には、「日付もなく、出だしの挨拶文もなし」に「あなたも気づいているでしょうが、私がこれは死者からのものであることはいうまでもなく、敗北

したものからの声であるといっても、私たちを侮辱したことにはなりませんまい」(129)という言葉から、「この文は長い沈黙に対する弁明ではなく、受け取る人と書く人との間に、崩れることのない、しっかりとした理解があることを物語っている。つまりこの文章はボンが敗北もしていないし、死んでもいないことを断言している。この文の書き手は誇り高い男であるが、その読み手は書き手の誇りと愛を共有していることを知っている」(Muhlenfeld, 74)と断じている。このミュールンフェルドの指摘は正鵠を得ている。すなわち、この手紙を書いた人物と受け取る人物の間には、言葉で伝えなくとも通じる信頼感、相互理解が厳然と存在しているのである。

さらにこの手紙の主旨である「僕たちは長い間待ち続けた」(131)という言葉は、「明らかに結婚を遅らせることに対するお互いの同意、あるいは少なくとも暗黙の合意があった」(Muhlenfeld, 76)と指摘し、「今、僕が思うに、君と僕は、とても奇妙なことに、生きることを運命づけられている人々に含まれているのだ」(132)というボンの結びの言葉は、結婚を遅らせた理由の一端はジュデイスを実際の未亡人にしたくなかったからであるとする。この解釈はジュデイスがこの手紙を受け取ったとき、「ありあわせの布切れでウェディングドレスとベールを作り」(132)始めたことを考慮に入れると、妥当であるといえる。ボンが最初にサトペン荘園に姿を現したときに、ジュデイスの母、エレンは二人が婚約したと思い込み、町の人々に触れ回った経緯もあり、ジュデイスがボンからのこの手紙を受け取るやいなや結婚の準備にとりかかったことも肯けることである。この手紙を書いたボンが受け取る人物としてジュデイスを想定していたとすれば、ミュールンフェルドの論ずる通りであろう。しかし、この手紙をボンがジュデイスに宛てて書いたものと保証しているものは、彼女が受け取ったという事実でしかない。

ここで問題となるのは、それまでジュデイスに宛てて手紙を書いたことがなかったボンが、なぜこの時点で手紙を書いたのかということである。シュリーヴとクエンティンが想像しているように、ヘンリーがボンに手紙を書くことを認可した(authorize)という可能性について検討してみる必要がある。その可能性が成立するためには、その前提として、妻子がいるボンが戦線を離脱して、ジュデイスと結婚するためにサトペン荘園へと向かうことが想定されていなければならない。とすると、重婚をあえて行おうとするボンは、ジュデイスとの結婚に何を求めていたのだろうか。考えられることの一つは、クエンティンとシュリーヴが思い描くように、ボンはトマス・サトペ

ンに息子としての認知を得るために強硬手段を取ったということになる。そのような前提を踏まえると、ボンがジュディスに宛てて手紙を書くことをヘンリーが認可したとすれば、ヘンリーの認可はボンに対するというよりはジュディスに対する配慮によるものではないのだろうか。というのも、ボンがジュディスと結婚するならば、「重婚、あるいは黒人との結婚、あるいは近親相姦」のいずれかの可能性が生じるであろうし、結婚しないとすれば、エレンが町の人々に触れ回った婚約が解消されたことに対する説明が求められるであろう。ヘンリーに残されている選択肢は、ジュディスを、そしてサトペン家を傷つけることなく予想される困難を回避するためには、ボンにジュディス宛の手紙を書くことを認可するとともに、ボンがジュディスと結婚できない状況を自らの手で作りあげることではなかったのだろうか。

手紙を受け取ったジュディスはクライティとウェディングドレスとベールを作り始めた。そのことが町の人々に伝わることにより、ジュディスとボンの婚約が実体化されたのである。それとともに、ヘンリーとボンがサトペン荘園の門に到着したときに南北戦争の最後の一発が発射され、ジュディスは「結婚していない未亡人」となる。それによって、ボンとトマス・サトペンとの血のつながりがあったのか、あるいはなかったのかという問いは不問に付されることになったのである。それに止まらずに、ジュディスはボンをサトペン家の墓地に葬り、実質的に家族の一員であることを世に知らしめたのである。こうして一通の手紙と一発の弾丸により、ジュディスの名誉のみならず、サトペン家の名誉は守られたのである。

しかし、このような解釈が成り立つためには、ボンの真似をしてきたヘンリーがボンに対して手紙を書くことを「認可する」立場に立ったことを認めなければならないだけでなく、ボンがジュディスに対して復讐からであれ、愛情からであれ、結婚するという意志を持っていたことを認めなければならない。とするならば、ヘンリーのボンに対する立場の変容を説明する必要があるだろうし、ボンがジュディスとの結婚を望む理由を説明する必要があるだろう。しかしながら、充分、説得力を持つ説明をすることは難しいのではないだろうか。この件についてヘンリーもボンも直接語ることはなく、状況を基にした説明も仮定の域を出ないからである。とするならば、ボンが書いた手紙をヘンリーが読み、それをジュディスに送ったことを認めるとしても、クエンティンとシュリーヴが想像しているように、ボンがジュディスに宛てて手紙を書いたことには必ずしもならないのではないだろうか。

というのもクローズが指摘しているように、「手紙の第一段落にしばしば現れる一人称複数代名詞 (“we,” “us”) は、書き手が戦場の兵士たちとともにいることを言っているのであって、手紙の受取人との関係のことは言っていない。『僕たち』が書き手と読み手の（再びの）結びつきをおそらく想定し、あるいは伝えている唯一のものは、『僕たちはずいぶん長い間待ち続けた』という第二段落の一行目の文だけである」(Krause, 236)とするならば、この手紙はどういうことになるのだろうか。手紙の書き手がボンであるとすれば、第一段落に現れる「僕たち」という戦場の兵士とともにいるのはボンとヘンリーを指すのであり、ボンとジュデイスを指していないことは明らかであろう。そして第二段落の一行目の「僕たちはずいぶん長い間待ち続けた」の「僕たち」は当然、第一段落の「僕たち」を指しているのではないのか。ボンは手紙の受取人としてヘンリーを想定していたと考えることは、ごく当たり前のことではないのだろうか。とするならば、僕たちが長い間待ち続けたものとは何なのか、という問題が生じる。

学生部隊の隊長であったボンは、たとえ空腹に苛まれ、装備の不足に苦しんでいたとしても、部隊の士気を鼓舞するためにも戦いに勝利を収めることを信じていたであろうし、信じようとしたことであろう。そして弾薬を必要としていた部隊がようやく手に入れた箱には、70年前のフランス製のすかし模様が入った最上の便箋と、ニューイングランドで製造されて12ヶ月も経っていない最上のストーブの磨き粉が入っていたという皮肉を前にして、ボンの緊張感の糸は切れてしまったのではないだろうか。ボンは「死んでしまった南部の最良のもの」に「征服し・・・やがて生き延びることになる北部の最良のもので書いた」(131-132)手紙をヘンリーに送ることで、部隊長であることを辞め、戦うことを止めることを伝えたのではないだろうか。

では、この手紙をヘンリーはどのように受け止めたのか。ヘンリーは手紙の書き手が誇りと愛をもっていることを知るとともに、戦いに負けた南部で生き続ける運命を引き受ける決意を知る。戦いに負けたとしても、それで南部が消滅するわけではない。ヘンリーはボンが手紙の中で示した男同士の友愛を確認すると同時に、サトペン荘園にいるジュデイスを想起したのではないだろうか。男同士の友愛を男女の恋愛の情に読み替えることが可能であることを思いついたヘンリーは、一つの物語を紡ぐ覚悟を決めたのではないだろうか。それは、クエンティンとシュリーヴが思い描いたように、ボンがヘンリーに前方にいるのだから射殺しても誰にもわかりはしないと、挑発した

ような事情が二人の間にあったとしたならば、ヘンリーはその事情を最大限利用しようとしたことであろう。ボンをサトペン荘園に連れてきたことで、母親のエレンがボンとジュデイスの婚約を決め、町の人々に触れ回るという事態を生んでしまったことを知っているヘンリーは、ジュデイスの婚約が成立していたことを証明するかのようになり、ボンをサトペン荘園に向かわせるとともに、南北戦争の最後の弾丸をボンに向けて発射することにより、サトペン家とボンをめぐる物語に自ら幕を引いたのである。

ジュデイスは手紙を受け取ると、ウェディングドレスとベールを作り始めるが、これはミュレンフェルドが述べているように、結婚の遅れを弁明した手紙であるとジュデイスが受け取ったと、ひとまずは考えることができる。しかし、ボンを母親の墓石の横に埋葬した一週間後、ジュデイスはその手紙をクエンティンの祖母の手に渡した。手紙は「少なくとも書かれたものであり、いつの日か死ぬものであるという理由のために、かつて存在したものに印をつけるものではある」(127)と述べたジュデイスの表情は、「窺い知ることができず、穏やかで、静謐そのもの」(128)であった。その手紙を渡されたクエンティンの祖母は、ジュデイスが自殺するのではないかと心配している。ジュデイスは即座に否定するのであるが、手紙を読んでいないクエンティンの祖母がジュデイスの身の上を案じたのは、その静謐な態度にただならぬものを感じたからであろう。しかし、ジュデイスがボンからの手紙をクエンティンの祖母に渡す本心について明かすことはない。ただ、手紙を渡されたクエンティンの祖母がジュデイスは自殺するのではないかと心配をしたことは間違いないし、そのような心象を抱かせるものがジュデイスにあったのだろう。ジュデイスが手紙を渡す行為には、まさに乾坤一擲の思いが込められていたからではないだろうか。

このジュデイスの思いには、ボンを自らの手で殺さざるをえなかったヘンリーの断腸の思いを引き受けるとともに、サトペン家の体面を保つ覚悟が込められているのではないのか。すなわち、サトペン荘園の門にたどりついたボンが死ぬことで結婚の約束が現実存在したことが知られるとともに、未婚の未亡人として認知されることになる。その文脈の元では、ボンの手紙は結婚の遅れを弁明したものであるとクエンティンの祖母が解釈することが予定されているのである。あたかも語られることは、語り手の数だけの語り方が生まれることを危惧して、書かれたものが必要であるともいえるのである。とするならば、手紙がクエンティンの祖母に渡されることは、ジュ

デイスとボンの婚約があったか、なかったかという問題設定が無効になることが意図されている。

『アブサロム、アブサロム！』はトマス・サトペン家の勃興と没落に纏わる物語をローザ、コンプソン氏、シュリーヴ、クエンティンそして匿名の語り手が紡ぐのであるが、没落の主たる契機になっているのがチャールズ・ボンとサトペン家のかかわりである。すなわちヘンリーが生得権を放棄して家を飛び出したことが、ボンとジュデイスは結婚することができないとするサトペンの意向に異を唱えるものだったとすれば、ボンとジュデイスの結婚に物語は集約される。すなわちサトペンがジュデイスとボンの結婚を拒絶したのは、ボンはサトペンがハイチに残してきた息子だからなのか、あるいはボンには黒人の血が流れているからなのか、あるいはボンにはすでに妻子があったからなのか、あるいは語り手たちが思いもよらないそれ以外の理由があったからなのか、と原因を探ることになる。

あるいは、そもそもボンとジュデイスの間に婚約は成立していたのか、婚約とはエレンの中にだけ存在したものではなかったか、という問いに答える必要もあった。婚約が成立していなかったとすれば、ヘンリーが生得権を放棄して家を飛び出す必要もなかったことになる。その意味では、ヘンリーがジュデイスにボンの手紙を送ったことは、ヘンリーの生得権の放棄には意味があったことを裏づけるものであるとともに、その手紙をジュデイスがクエンティンの祖母に渡すことにより、ジェファソンの町の人々がボンとジュデイスの婚約があったことを確認することになる。それに加えてジュデイスはボンの亡骸をエレンの横に埋葬することで、サトペン家の一員と見做していることを宣言するだけでなく、ボンの墓石に「チャールズ・ボン。ルイジアナ州ニューオーリンズにて生まれる。1865年5月3日ミシシッピ州サトペン荘園にて死す。享年33歳5ヶ月」(190)と記したのである。この墓碑銘はクエンティンとシュリーヴによって披露される、ボンはトマス・サトペンがハイチに残してきた息子であるとする経歴とは異なっている。ここで問うべきことはどちらの経歴が正しいのかではなく、ジュデイスが印した墓碑銘がもたらすものは何かということである。端的に言えば、その墓碑銘が明らかにしていることは、チャールズ・ボンは出自が不明確な、正体の知れない人物ではないとともに、サトペン家の者とは血のつながりはない人物として確定されることである。ボンの出自に関する事柄を知る者が現れ、墓碑銘に異を

唱えないかぎり、ボンは墓碑銘に印された過去を持つ人物として受け取られることになる。異を唱える可能性がある人物はクエンティンであろうが、彼はシュリーヴとともにサトペン家に纏わる話を披露したものの、それを公にすることはなかった。

とするならば、ジュデイスがボンからの手紙をクエンティンの祖母に渡した行為と、ボンの墓碑銘を自ら記した行為は関連しているのではないのか。ボンを埋葬した一週間後にボンからの手紙がクエンティンの祖母に渡されたことによってボンとジュデイスの間には婚約が成立していたことが明らかになるとともに、ボンがサトペン荘園の門に姿を現したことによって、結婚が執り行われる予定であったことが明示されたのである。さらにクエンティンの祖母によって手紙が保存されるならば、出来事の記録として受け取られ、ジュデイスとボンの婚約に疑問を抱くものはいなくなる。同様に、ジュデイスが印したボンの墓碑銘もボンの過去を明らかにする証拠として残ることになり、彼の出自が確定されるのである。ジュデイスが手紙と墓碑銘という記録を残すことにより、さまざまな噂や憶測をすべて封印してしまったのである。ジュデイスが行ったことは、まさに出来事の歴史化ではなかったか。

『アブサロム、アブサロム！』はローザ、コンプソン氏、クエンティン、シュリーヴ、そして匿名の語り手による語りで構成されているので、語り手と聞き手の呼吸があった場合にはまさに語りのダイナミズムとでも言うべき場が作り出されることになる。すなわち、語り手と聞き手のどちらが語っているのかが問題とはならず、「話すことと聞くことの幸せな結婚」(316)が生まれるのである。その意味では、サトペン家の物語を紡ぐローザとコンプソン氏の話聞いて、クエンティンとシュリーヴが想像力を存分に働かせて、新たにサトペン家の物語を紡ぐ『アブサロム、アブサロム！』は、まさに虚実をないまぜにした物語を語ることの醍醐味を味わうことができる小説である。

しかしながら、語り手と聞き手の幸せな結婚とは一回性のものであり、その場に居合わせない人間にはあずかり知らぬこととなる。そこに欠けているものは、再現ということであり、歴史ということであろう。『アブサロム、アブサロム！』の作者であるフォークナーは、語りによって構成される作品について十分に知悉していたからこそ、ジュデイスのエピソードを描いたのではなかったか。すなわち、一通の手紙と一つの墓碑銘という物証を残すことにより、『アブサロム、アブサロム！』というテキストは語りによる重層

性のみならず、テキストとしての重層性を獲得しているのである。

Works Cited

- Brooks, Cleanth, *William Faulkner: The Yoknapatawpha County*, (New Haven and London, Yale University Press, 1963)
- Faulkner, William, *Absalom, Absalom!* (New York: Random House, 1936)
- Krause, David. "Reading Bon's Letter and Faulkner's *Absalom, Absalom!*" *PMLA* 99 (1984): 225-241.
- Muhlenfeld, Elisabeth. "'We have waited long enough': Judith Sutpen and Charles Bon." *Southern Review* 14 (1978): 66-80.
- Watkins, Floyd C., "What Happens in *Absalom, Absalom!*" in Elizabeth Muhlenfeld ed., *William Faulkner's Absalom, Absalom!: A Critical Casebook* (New York and London, Garland 1984) 55-64.